

——俗に木乃伊取りが木乃伊に、なんてエ言います、これなんざア、まさにそれ。本人にやる気がある分だけ、付き合わされるこつちは堪ったもんじゃアねエ。そんなお話。——

## ● 船徳

「おまはん、とうとう勘当されなすったつてね」

ごろりとだらしなく横になった男に、一言。

置屋の二階、ある晴れた日の午後。眠気を誘う陽気。

そんな中、馴染みの女郎から発せられた言葉は、猛烈な寒波のごとく徳に襲い掛かった。

ところがこの徳、そんな女郎の言葉も何処吹く風。抜け抜けと答えた。

「ああ、とうとう食らつちまった」

「ああ、じゃないだろうによう。全くこれから一体どうするつもりなんだエ？」

それでも、馴染みの女郎はこの徳が愛しくてならないのか、煙管を吸い付け、徳の口に運んでいく。

「そうだなア、こどもでエぶお前に持つてもらつてるし…」

「働きなんすかエ？」

「そうだなア」

どうしようか…、徳がそう呟いた時だった。

「船頭さん、ちよいと岸イ、着けてくんな」

突然外から、こんな声が聞こえてきたのだった。

徳は、がばつと跳ね起きると、障子から身を乗り出す様にして今の声の主を探した。

「おまはん、どうなすつたんだエ？」

「今の奴、気取つた声出しやがって。てエした通人氣取りだ」

そんな憎まれ口を利きながら尚も川面を探すと、今しも一艘の船が岸へ着こうとしていた。滑る様に岸へすうつと近づいたかと思うと、ぐらりともしせず岸辺へぴたつと船をつけるのが見えた。

「へエえ、うめエ事しやがる。あの客よりよつぽど粹だぜ。

決めた、船頭になる」

「はア？」

呆気にとられた女郎をよそに、徳は「決めたが吉日」とか何とか訳のわからないことを喚いて、置屋を飛び出していった。

しばらくの後、無理矢理船宿の船頭の一人になった徳の出番が回ってきた。

その日はちょうど四万六千日。観音様にお参りをするからと、それにかこつけてまんまと女房から解き放たれた男たち

## 【由来・成立】

初代古今亭志ん生作の人情噺である、「お初徳兵衛浮名棧橋」の発端を、初代三遊亭円遊がパロディ化した噺。

## 【ウンチク】

勘当された若旦那が船頭になると言ったのは良いが、舟をこぐ技術がなくて乗った客が震え上がる……と言うお話。

元になった「お初徳兵衛浮名棧橋」では、徳兵衛が船頭として最初の頃の話があったのかどうか判りません。元は結構長い話で、何日にも分けて話していたと言いますから、船徳の元になるような部分があったかも知れません。ともかく、原話である人情噺ではあつという間に若旦那「徳兵衛」から船頭の「徳さん」になっています。そして、若旦那だった頃から徳さんを見知っていたお初という芸者が、徳さんに送ってもらう途中、雨が降ってきたために途中で船をもやつて雨宿りします。そこでお初と徳さんがお酒を飲みながら色々な話をする内、雷が落ちました。雷が嫌いなお初が徳さんに縋りつくのですが、稲光で乱れたお初の白い足が見えて……。

本来はこの後もお初と徳兵衛を主人公に、色々な出来事があるのかも知れませんが、とりあえず探せた中では、ここで「本が破けてこの後が判らない」と言うサゲで終わります。

後に、この徳さんが一人前に成長し、わりない仲になったお初と人情噺的なアレコレが起る噺が三遊亭円喬により上演され、その速記が『文芸倶楽部』（明治四五年、第一八巻六号）に「後の船徳」と言う題で掲載されました。が、現在はその噺を演じる方はいらっしやらないそうです。

さて、パロディたる船徳。船頭になった徳さんのデビューが、四万六千日。七月十日に行われる浅草観音の縁日の日で、この日にお参りすると四万六千日（約百三十年に相当）お参りしたのと同じ御利益があると言われました。江戸っ子にとつては遊びに出掛けるまたとない機会。そんな日にこんな恐ろしい船に乗つたのは、ある意味厄落としと言えなくもない……？ その後のお参りもさぞ真剣だったでしょう。

この勘当された若旦那が働き口を求めたのが船宿ですが、陸上の道だけでなく川の多かつた江戸の町は、船運も盛んで物を運ぶ以外にも人も船で行き来しました。

船宿は船で出かける客に斡旋する商売ですが、そもそもは船員達の宿としての役割や仲買、人や荷物を運ぶ船を貸し出すなどをしていたと考えられます。その内、釣りや物見遊山、交通手段としての舟の手配もするようになり、同じ船宿と言つても、業態が細分化したのではないでしょうか。

『近世風俗志』によれば、船宿の看板には、釣り船、荷足にたりなど取り扱う船の種類を記す店もあつたそうです。特に、堀

## ● 写真の仇討ち

ここにございますある男、血相を変えて近所のオッサンのとこに飛び込んでまいります。

「オッサン、もうわしやあダメじゃあ」

「なんやなんや、藪から棒に。ともかく落ち着いてワケを話してみい」

この男、とある廓のとある女郎と深い仲になって起請まで交わしたのに、もっと良い旦那が出来て今度落籍されると言う。約束が違う、と問い詰めれば、

「起請を交わすのもわちき達の手管の一つやおまへんか。本気にしはったん？ 呆れた」

と、手のひらを返したような冷たい待遇。騙されたと判つて、怒り心頭。

「あの女を殺してわしも死ぬ〜」

と叫ぶ男にオッサンは呆れて、

「向こうは玄人や。騙しますよと看板上げて商売してんねん。そんな女子と命を引き換えにしてどないすんねん。よし、お前にええ話を聞かせたろう。昔、唐土（中国）のチヨウジヨウシという人が晋の国のチハクという大名を滅ぼした。そのチハクにはヨジヨウという忠義な部下がおったんや。ヨジヨウは主人の仇を討とうとチヨウジヨウシを付け狙つてた。あ

る日その機会が訪れて『主人の仇、チヨウジヨウシ覚悟〜』と切りかかった。するとチヨウジヨウシは『まあ待て。お前の主人を愛する気持ちは分かるが、わしが今お前に討たれると一旦治まった天下がまた乱れてしまう。そうじゃ』言うて着てた服を脱いで『これをわしやと思つて恨みを晴らせ！』その服を貰ったヨジヨウは剣を抜いて『主人の仇〜』と服を突くと、服から血がタラタラー。人の一念とは恐ろしいもので、それから三年三月もチヨウジヨウシは病に苦しみ死んでしもうた。お前もこの話に習つて仇討ちをせえ！ 何かその女子の物はないか？」

オッサンの話を聞いて、男は胸のポケットを何やら探ります。あ、と思ひ出して

「それやつたら写真があります」

「よし、ほなその写真を思いつきりヒ首で突いて恨みを晴らせ！」

「よつしや〜覚悟〜！」

とヒ首で写真をブス〜と突き刺しますつてえと、写真から血がタラタラーと流れ落ちてきたから大變。

「アホでも人の一念とは恐ろしいもんじゃ、写真から血が出たぞ〜」

と吃驚するオッサンに、男が一言。

「ちやいまんねん、指突きましたんや」

——了

## 【由来・成立】

明治十七年に刊行された二代目五明楼玉輔の口演本「開明奇談写真廻仇討」を落語化。

「一枚起請」という噺と結びついたもの。

## 【ウンチク】

原話である「開明奇談写真廻仇討」は、勝海舟に同道してアメリカへ渡った医者の卵が主人公です。自分が不在の間に父が不義をなし、母がそれに愠気をおこし、下男として医者の家に上手く入り込んだ悪い男が母をそのかして父を毒殺してしまいます。そんな因果の果てに無くなってしまった家と家族の行方を尋ね、ひよんなことから知り合っ病を治した相手が、父を殺し、母と行方をくりました男だと判ります。息子は仇憎しと思えど、一度は道理を説いて男の罪を許します。が、男のなしてきた悪行の因果は巡り、結局男は自死してしまい、図らずも仇討ちがなる、という話です。

この作中に、仇の袖を相手と見なして短剣で突く予譲の話が出てきて、それになぞらえて息子が男の写真をナイフで突き仇討ちが成ったことにしよう、と語ります。この写真の仇討ちにも、その予譲のくだりが使われています。

今ではカメラよりも、スマホで手軽に写真が撮れて、人にあげるのもデータ送信や共有で簡単、なんて時代ですね。カ

メラも画質や保存できる容量が増えたので、気がついたら数百枚なんてあつと言う間に撮れてしまいます。写真そのものもデータがメインだから、紙のように嵩張ったりしない。必要な写真だけ紙に印刷して、加工も簡単。けれど、何かで消えたら一瞬でおしまい、という儚さと背中合わせのような気がします↑恐らくもう二度とは撮れない写真データをうっかり消した過去が…(涙)

そんな当たり前とも言える写真ですが、技術や機材そのものが日本に入ってきたのは、幕末、嘉永元年（一八四八）のことです。

鎖国政策を揺るがす対外要素や、飢饉などの国内の動揺に不安を抱いたことから蘭学弾圧が起こった他方で、蘭学の知識や南蛮渡来の文物は一般庶民へも広く浸透していった時代でしたが、カメラが入ってきた当初は、大名による西洋技術の研究の一環として捉えられていたようで薩摩、福岡、佐賀、萩、津、尾張藩などで写真技術の研究が行われていた記録が確認されています。

嘉永元年に伝わったカメラは、銀板写真とも言われるダゲレオタイプで、感光させた銀板そのものを観賞対象とするものでした。薩摩藩主であった島津斉彬が主導で、写真技術を含めた西洋技術の研究を始めました。

その一環で撮影された島津斉彬像は、日本人によつて撮影

## ● 碁どろ

碁仇の旦那が、今日もいそいそとやってくる。だが、今日はどうにも相手の元気がない。聞けば、奥方から禁止令が出されたという。

何分、碁と煙草が何よりも好きな二人。スパスパやりながらばちり、ばちりとやっていると、他のことなどどうでもよくなってしまう。今指に挟んだ煙草をどのくらい吸ったのかすらも判らないほど。そんなだから灰が落ちて畳に焦げを作っても、いっこうに気が付かないのだ。このままでは家が燃え落ちても気付かないだろう、と奥方はカンカン。

ぴっしやりやられた二人は途方に暮れたが、ちよいと待てよ、と思ひ直す。

どうせ二人ともザル碁だし、おまけに一局十五分もかからない。それならば碁は火の気のない座敷で打つ。そして終わるごとに隣の座敷へ行って吸い溜めすりゃあいい、と話を決める。

ところが、いざ盤を囲んだらそんな話なんぞすっかり忘れてしまった。二人とも碁盤に夢中になって

「マッチがないぞ」

「たばこを持ってこい」  
とやらかした。

閉口した奥方は、一計を案じ、マクワウリを小さく切って運ばせた。二人ともマクワウリを手に「なんだ、火の付きが悪いな、と」「まったく、と」なんて喋りながら、気付く様子もない。ここまで気付かないのもいかなものかと思うが、この様子なら、と安心した奥方は湯へ出かけてしまう。そこへ泥棒が忍び込んできた。静かな家には誰もいないらしいと見て、大きな風呂敷目一杯にたんまり頂戴した。さて、これですらかろうとした所へ、聞こえてきたのがパチリパチリと碁石を打つ音。

この泥棒、二人に輪をかけた碁狂い。暫くはさつさとこの家を出なければと言う思いと、対局を見たいという思いで迷っていたが、聞いているうちに矢も楯もたまらなくなり、つい音のする奥の座敷の方に忍び足で近付いた。

最初は襖越しに窺っていたが、どうにも遠くで見えやしない。大胆にも風呂敷包みを背負ったままそおつと中に入り込んだ。勿論ちよいと覗くだけのつもりが、見ているうちにやっぱりつい口を出した。

「うーん、ふつくりしたい碁石で。ああ、互先でおやりですか。こうつと、渋い所だね。うんうん、そこは黒にツケるのが定石。ここは切れ目……、と、ああっ！ あーた、ダメ

### 【由来・成立】

上方では「碁打盗人」と言う題名で演じられていたそうです。この噺を、三代目柳家小さんが四代目桂文吾に教わり、東京に移したと言われています。実は四代目三遊亭圓生から習ったという説もあるとか。

小さんは噺の筋や演出などを練り直して、十八番物の中でも特に傑出したネタとして高座に掛けていたとか。現在まで代々の柳家一門が演じているそうです。

原話不詳。

### 【ウンチク】

「碁に負けたら将棋で勝て」なんて諺があります。一方で失ったら他方で勝てという意味ですね、囲碁と将棋の距離は近いのだから遠いのだか分かりません。どちらも伝来して千年以上、起源ははっきりしておりませんが古くから親しまれている盤上遊戯です。ちなみに将棋は中国の「象棋」とも似ているようで駒などに違いがあり、「大将棋」「中将棋」「少(小)将棋」など複雑化して貴族達に楽しまれた後、サイズや駒がまとまり、江戸幕府が公式に認めたという少将棋が現在の形とのこと。先に伝来したのは囲碁で『和名類聚鈔』(九三一〜九三八年成立)には「囲碁」はあるけど「将棋」はなく、『和漢三才図会』(一二七二年成立)には両方の記載があります。

中国では囲碁も将棋も双六も六博(賽子を投げ、出た目の数だけコマを進める盤ゲーム)も駒は『棋(碁)』と呼んでおり、日本でもそれにならない、しばしば表記が混同していたりします。

囲碁は成立こそ未詳ではありますが、中国春秋時代(前七七〇〜前四〇三年)には一定の形を成し(将棋のように分岐したり、ルールが変わったりすることも少なかったそう)、戦国時代(前四〇三〜前二二一年)では名手がおり、孔子や孟子もその言説に引くほどに発達したといわれています。奈良時代には日本に伝わり、天皇はもちろん、多くは公家や僧侶たちに親しまれたとか。当時はただの遊興、公家達の消閑のためのもので双六などと並んで金銭を賭けることが当たり前だったそうです。

縦横一九路の交差する線上に黒と白の石を置き、陣地を広げるといふルールはシンプルなようでいて奥深く、人間問わず神仙すら夢中にさせたようです。このゲーム、様々なエピソードがあり、道教的な教えから身を滅ぼす典型としての訓示など、多くの解釈を含んで登場していたりもします。のめり込むと時間の流れを忘れるといわれ、また盤上は世の趨勢を顕すともいわれ、チェス同様に人の世の有為転変の絵姿とみなされもしたそう(某囲碁マンガ『ヒールの碁』に掲載された三コウの逸話もありますね)。方形の四隅の点と星、天と地